

「長崎医師保育サポートシステムは10周年を迎えました！」

長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンター センター長 南 貴子

皆様、日頃より大変お世話になっております。長崎県医師会とともに「長崎医師保育サポートシステム（以下、保育SS）」の協働運営事務局である長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンター（以下、センター）の南 貴子です。この度、保育SSが10周年を迎えるにあたり、県医師会の皆様の多大なご支援に深く御礼申し上げますとともに、2014年の運用開始から今に至る10年の経過を簡単にご報告させていただきます。

まず、2009年に日本医師会によって「女性医師の勤務環境の現況に関する調査報告書」が作成されました。結果の図を以下に示します（図1、図2）。

この図1では、出産時の休職は当然のことですが、次に多い休職・離職理由は子育てです。また図2にある、仕事を続ける上で必要な支援策では、保育施設・学童施設の充実、病児保育、ベビーシッターの斡旋・利用費用の補助、保育料の助成など、三分之一は子育てに関するものが上がっております。このころより、女性医師の休職・離職防止のためには、職場環境・勤務環境と共に子育てを支援することが必要だと考えられ、多くの大学病院において子育て支援を含めた女性医師支援の部署ができております。

長崎大学病院においても、2012年に伊東昌子前センター長がセンター設立当初より、長崎県・長崎県医師会とともに、医師の子育てに直接効果をもたらす保育支援を行い、仕事と子育ての両立を支援したいという強い思いで、他県ですでに始まっていた医師向けの保育サポートを参考にして、「長崎県医師会保育サポートシステム」の準備が始められました。

2014年 長崎大学病院に勤務する医師を対象に運用開始、医師への説明会を開催し、サポーターさんの募集・研修・登録の流れについて、私が登録医師の第1号として利用しながら運用を確認しておりました。私が依頼したのは、その当時小学校2年（現在高校生）の次男を学校から習い事までの送迎+おやつを提供をしてもらうことで、自分で安全に移動できるまでの2年弱の期間をサポートしてもらいました。おかげで、私が勤務している時間帯に、次男はおなかを満たしてもらい、それから習い事へ連れて行ってもらう、有益な時間を過ごすことができました。この「おやつの提

図11 仕事を中断（休職）、離職した理由（n=2,931 複数回答）

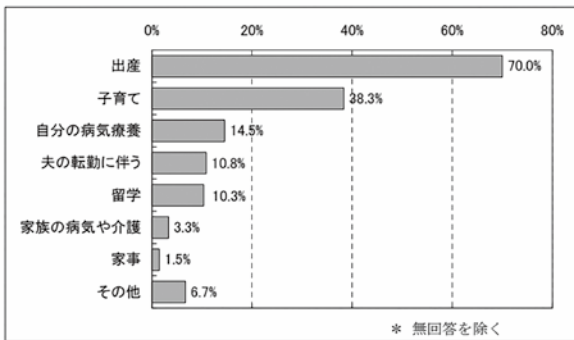


図1

図26 仕事を続ける上で必要な制度や仕組み・支援対策（n=7,297）

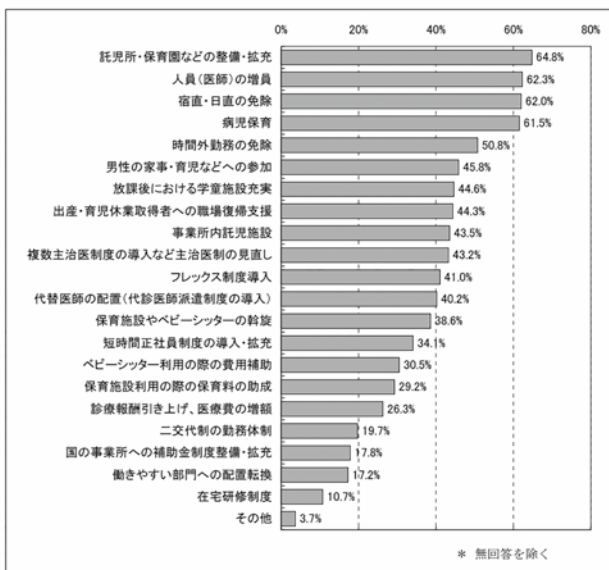


図2

供」「自家用車での送迎」は長崎市のファミリーサポートではできない、保育SSの特徴の一つです。また、お子さんが病気となり軽症であれば、サポーターさんに保育を依頼することができることも、医師を対象とした保育SSの特徴の一つで、これが子育て中の医師の皆様へ安心していただける大きなポイントです。

また、この時期には、専属のコーディネーターが2名おり、1名ずつ、長崎県医師会とセンターに常駐して業務を分担しておりました。すべてが初めてのことなので、迷うときには山口県医師会、群馬県医師会、東京女子医科大学など先行する医師向け保育サポート運営機関に細かく尋ねながら、運営していきました。年1回登録医師・登録サポーターと関係者に配布する「保育サポート通信」には、開設時からご尽力いただいた県医師会の関係の皆様が寄稿されており、皆さんの熱い思い、本当に熱望・切望してこの事業を立ち上げられたことが良くわかります（資料1）。

2015年 対象となる医師を、長崎市内近郊（＝時津・長与町まで含めた長崎医療圏）に拡大しました。対象拡大の案内を行うと、長崎大学病院以外の医師が4名登録されました。



2016年 対象となる医師を諫早・大村市近郊

（＝県央医療圏）に拡大しました。

2017年 長崎医療圏・県央医療圏以外の地域において、病院ごとのシステム導入を進めるため、新・鳴滝塾の研修医のいる病院や子育て世代の医師が多くいる病院に向けて案内を行いました。すでに公的あるいは民間のサポートが確立している五島市、対馬市の基幹病院は導入の希望がありませんでしたが、それ以外の佐世保・島原・上五島・壱岐の病院で導入が進みました。その際には、連絡係となり協力してもらう「事務協力担当者」を病院長に選出いただき、面談の手配などを手伝ってもらうようにいたしました。

2018年 長崎県からの補助金の最終年となり、県・県医師会・センターの三者で今後の運営について検討し、長崎県からの受託事業「あじさいプロジェクト」の一環として、業務をセンターへ移管し、センターの事務補佐がコーディネーターを兼務し、名称を「長崎県医師会保育サポートシステム」から「長崎医師保育サポートシステム」と改称することになりました。

2019年 長崎大学病院の会議において、保育SSの主な運営費を拠出する承認を得て、さらに今後の新たな体制を協議しました。その結果、県・県医師会・大学病院が運営にかかわる費用を分担

	<p>安全で、使い勝手の良い 保育サポートを</p> <p>長崎県医師会 常任理事 上戸 穂高</p>		<p>子育て医師を、 優しく見守ります</p> <p>長崎大学病院 メディカル・ワークライフバランスセンター センター長 伊東 昌子</p>
<p>近年、医学部入学の女子学生の比率が増えつつあり、3割となっています。今後、欧米並みの5割に届く可能性のある中、女性医師を支える環境は整備されているとは言えない状況です。</p> <p>特に、働き盛りの時期と、結婚・出産・育児の時期が重なるので、その対策は社会的に重要な意味を持ちます。また個人のキャリアアップの夢を叶えることは、社会で女性の活力を生かし、職場での多様な働き方を創造することに繋がり、若い女性医師のモチベーション維持に有効だと思われま。</p> <p>以上を踏まえ、長崎県医師会は昨年、男女共同参画委員会を立ち上げ、メンバーと検討を行いながら、本年度から保育サポートシステムを開始しました。目指すところは迅速・安全で、融通の利く、使い勝手のよいサービス提供です。</p> <p>現在は長崎大学病院中心で動いていますが、今後長崎市内の公的病院へサービスを拡大したいと考えています。利用された先生方やサポーターの方々には是非、御意見を頂き、今後の事業活動に生かしたいと思うので、関係する皆様のご協力をよろしくお願いいたします。</p>		<p>長崎県医師会と長崎大学病院メディカル・ワークライフバランスセンターが共同で設置した「長崎県医師会保育サポートシステム」。子育て中の医師（男女問わず）が、仕事と育児を両立するための支援を目的に、ニーズに沿った保育サポーターの情報提供・紹介を行っています。本事業により、子育て中の医師の就労継続と、医師不足の解消につなげることで、長崎県の医療に貢献できればと期待しています。</p> <p>このシステムは、山口県医師会と群馬県医師会が先行して運用を開始しており、両医師会から多くの情報をいただきながら、長崎県に合うシステム作りを目指してきました。まずは長崎大学病院に勤務する子育て医師を対象としますが、ノウハウを確立したら、徐々に長崎県内へ拡大していきたいと考えています。</p> <p>もし、保育サポーターになりたい人をご存じでしたらご紹介ください。また保育に手助けを必要としている忙しい医師を見かけられたら、このシステムがあることをお知らせください。</p> <p>コーディネーターはじめ、システムの関係者が、優しく見守っています。</p>	

資料1

表 1

診療科	整形外科	消化器内科	麻酔科	循環器内科	産科婦人科	小児科	形成外科	泌尿器科	腎臓内科	内分泌・代謝内科	呼吸器内科	脳神経内科	放射線科	腫瘍外科	皮膚科・アレルギー科	移植・消化器外科	精神科神経科	救急科	耳鼻咽喉科	眼科	内科	血液内科	リハビリテーション科	脳神経外科	糖尿病科	緩和ケア内科	研修医	総計
登録医師数(名)	11	9	7	7	6	6	6	4	4	4	4	4	4	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	100
長崎大学病院勤務	3	5	5	2	1	1	1	3	3	3	2	2	1	0	0	2	2	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	41
長崎大学病院以外に勤務	8	4	2	5	5	5	5	1	1	1	2	2	3	3	3	0	0	1	2	2	0	0	1	1	1	1	59	

※登録医師数100名(68世帯)には夫婦とも医師の場合、それぞれの診療科にカウントしている。

し、登録医師からも登録料を徴収して運営にあてる体制となりました。

2020年 新体制1年目、長崎大学病院の運営会議において3年間の運営予算を確保。

2021年 新体制2年目、佐世保医療圏等で運用していた「地域病院における長崎医師保育サポートシテム」事業継続のために、現行の「長崎医師保育サポートシステム」に組み込みました。

2022年 新体制3年目、長崎・県央医療圏以外の地区では病院単位の導入で病院勤務医のみが対象であったため、医院やその他の医療機関に勤務する医師へと対象を拡大しました。これで、県内のほとんどの地域（五島市と対馬市以外）において、子育て中の医師が勤務場所・勤務形態にかかわらず、利用することができるようになりました。

2023年 長崎大学病院の運営会議において、5年間の運営予算を確保（～2027年度）。

2024年 10周年を迎えました。

このように、長崎県からの補助金終了後は、長崎県医師会の担当理事瀬戸牧子先生に相談しながら、財源の確保、対象地域、協力病院などを随時検討して、長崎県内の必要な地域で、保育支援ができる体制を整えてきました。コロナ禍でオンライン化が急速に浸透したことで、コーディネーターの派遣・調整が難しい場合には、Zoomを利用した三者面談（医師と保育サポーター、およびコーディネーターの顔合わせ）を行うことで、地域を問わずスムーズに活動の裾野を広げることができています。

2024年7月時点での、利用医師の状況をお知らせします（表1）。利用者の多くは、長崎大学病院の医師で、利用地域は長崎市内近郊ですが、長崎市内で利用した医師が佐世保へ異動した場合は、佐世保で利用を継続する場合も多く、利用地域2位は佐世保、3位は諫早となっています。

長崎大学病院以外で登録医師のいる病院は以下のとおりです。新・鳴滝塾の病院では、長崎みなとメディカルセンター、長崎原爆病院、済生会長崎病院、長崎医療センター、諫早総合病院、佐世保市総合医療センター、長崎労災病院、佐世保共済病院です。他には、聖フランシスコ病院、重工記念長崎病院、光晴会病院、千住病院、こども医療センターです。医院に勤務する医師も10数名おられますが、そのうち医師会A会員の女性医師に5名ご利用いただいており、医院の運営と子育ての両立のお手伝いをさせていただいております。また、対象の医師は、勤務地あるいは居住地が長崎県内であるという原則のもとに、佐賀県の病院に勤務する医師や、最近九州地区外の病院の在宅勤務をされている医師も登録されております。

運用開始から10年間の利用医師数・活動サポーターの総数を示します（図3）。おかげさまで年々増加傾向となっております。利用する医師からは、「安心して子どもを預けて仕事ができる」「学会に行くことができる」「資格試験の勉強ができる」「子どもの発熱などに対応してもらい、休む日が減った」など、本当に助かっている！とのコメントが多数寄せられます。感染症や台風・

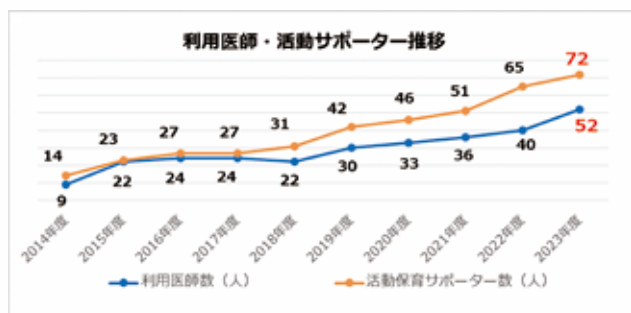


図 3

大雪などの気象状況による休園・休校などによって預け先に困る場合の受け皿としても利用され、コロナウイルス感染流行時期にも利用者は減ることなく増え続けました。

初年度登録から10年以上、現在も利用されている医師（登録第4号）からのコメントとお子さんの写真を紹介いたします（写真1・2）。

『長男を出産してから、保育サポートシステムを10年以上利用させていただいています。子どもが小さいときには、保育園や病児保育のお迎えをお願いし、学会出張の際の自宅での見守りや、資格取得に向けて勉強時間を確保したいときにサポートをお願いしました。今では、子どもたちも小学生になり、塾や習い事の送迎をお願いしています。保育サポーターさんに子育ての相談に乗っていただくこともあり、大変感謝しております。』

このように、お子さんの成長とともに依頼内容を変えながら長く利用され、ご本人は専門医取得、

学位取得などしっかりとキャリア形成をされておられます。

すでに私を含めて、子どもの成長とともに、保育SSを卒業する方もおられ、感謝のメッセージをいただきました。

『新年度より末子が小学校へ入学します。幼稚園の送迎をお願いしていた保育サポーターさんからも卒業させて頂きたいと思います。サポーターさんには物理的な支援のみならず、たくさんの助言を頂いたり、一緒に悩んで下さったり、本当にたくさん助けていただきました。本当にありがとうございました。』

さらに具体的な利用状況を示します（表2）。最初は月平均数名だった利用医師数が、2023年度は、月平均30名程度になりました。

医師がサポーターに支払う報酬額の表（図4）では、毎月数千円～10万円超、月1回～平日毎日など、必要に応じて利用されています。

お子さん出産後2週間目より、週5～6日×7年以上利用されているA会員で長崎大学病院消化器内科、医療法人今村 たちばなベイクリニックの南ひとみ先生からのメッセージもご紹介いたします。

『子育てサポートを受けて思うこと…生まれる前から信頼できるシッターさんに出会うことができ、その後も絶え間ないサポートをいただいた長女は、早いもので今年無事に小学生になりました。



写真1 保育園のお迎えをお願いしていた頃



写真2 最近の子どもたちの様子

表 2

年度	月平均 利用医師 人数	平時 利用時間	時間外 利用時間	平時病児 利用時間	時間外 病児 利用時間	総利用 時間
2014	4.1	397.5	33.5	9.5	2	442.5
2015	6.5	420	63.5	13	0	496.5
2016	6.8	441	257	4	2.5	704.5
2017	10.4	1387	457	21.5	0	1865.5
2018	10.3	2596	697.5	13	3	3309.5
2019	12.4	2501.5	500	42	4	3047.5
2020	17.3	2361.5	778.5	51.5	0	3191.5
2021	21.1	3765.5	974	123	4	4866.5
2022	24.2	5080	1244	78	0	6402
2023	29.8	5357	1702.5	61.5	23.5	7144.5

思い起こせば、出産後自宅に戻ったとき、2週間後から職場復帰となったとき、インフルエンザで倒れたときも家族以上に頼れる存在で、子育ての悩みやいろんなお話も聞いていただき本当に皆さんに感謝しています。』(写真3・4)

保育サポーターの登録は、2024年8月現在270名です。いろんな媒体を利用して募集を行っております。中には、本会誌での募集ページをご覧になった医師の奥様も数名おられます。皆さん、子育て経験や保育の経験があり、保育士・看護師・教員免許をお持ちの方もおられますが、まずは、医師の子育てのお手伝いをしたいという思いで応募してくださっております。

最近のサポーターさんお二人(写真5・6)の活動風景とコメントを、ウェブサイトで詳しく紹介しておりますが、どのサポーターさんも責任を感じつつ楽しくサポートをしている、お子さんがかわいい、頑張っている先生も素敵だと言ってください。



写真3・4 左の写真から7年経過して、小学校にいとこさんたちと初登校の日

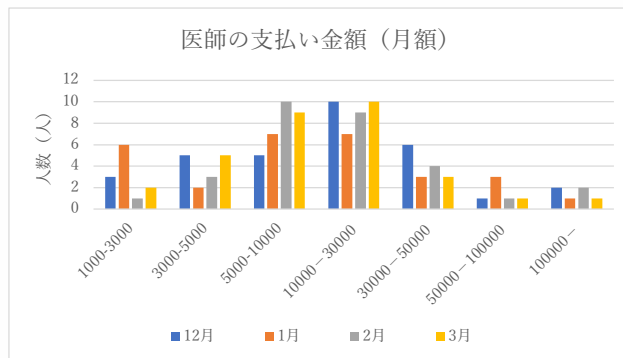


図 4 2023年12月～2024年3月の医師から保育サポーターへの支払い金額

医師の登録は、2024年8月現在70名で、病院・医院で働く様々な診療科・多様な勤務形態の医師からご利用いただいておりますが、男性医師・女性医師のどちらでも利用可能、パートナーが専業主婦/主夫でも利用可能なため、医師家族の頼れる親戚がわりとして安心してご利用いただけていると自負します。

今年度から、耐用年数10年程度といわれるチャイルドシート・ジュニアシートの更新をしております。お子さんをサポーターの自家用車で送迎する際に無料レンタルしておりますが、保有していた9台のほぼすべてが交換の時期を迎えており、今後毎年県医師会と長崎大学病院で計3台/年を購入して更新する計画としておりますが、今年度購入した3台はすでに利用中で、予備がありません。そのため、迅速なりリニューアルを目指して、寄附を募ることといたしました。

また、利用医師数の増加に伴い、活動する保育





写真5

サポーターが増加しているのは前述のとおりです。そのため長崎県医師会が負担する保育サポーターへの保険料金は徐々に増額しています。今後も多くの医師が利用できるように、保育サポーターの登録をさらに充実させるため、募集・告知のための費用がさらに必要になっております。長崎大学病院からの運営資金だけでは、かなり限定的な募集・告知となっており、医師とサポーターのマッチングに苦慮する場面が出てきております。

つきましては、長崎県医師会会員の皆様に、子育て世代の医師が必要としている「長崎医師保育サポートシステム」の今後の事業を円滑に継続するために、ご寄附をお願いしたく存じます。長崎医師保育サポートシステムがさらに充実して医師の子育て支援を行うことにより、長崎県全体の子育て中の医師が明るい将来像を描くことができると思っております。尚、保育SS支援の寄附につきましては、長崎大学病院の部署への寄附となり、税法上の優遇措置はございますが、特別の返礼品もなく、インターネットからのクレジット



写真6

カード払いもできず、銀行振り込みだけとなります。センターにご連絡いただければ、寄附金申込書を送らせていただきますので、お電話でもメールでもお知らせください（詳細は、下段の長崎大学病院ウェブサイト「ご寄附のお願い」のページをご覧ください）。

最後に、この10年間で、子育て・家事を女性医師だけではなく、家族だけではなく、家族以外の人と共有することが少しずつ進んできました。「育児や家事は女性が行うもの」「育児や家事を行う女性のための支援は男性や独身者が行うもの」というこれまでの役割分担意識が今後さらに薄れていき、いずれ無くなっていくことを願っています。

そしてこれから先も、長崎県内の子育て中の医師が仕事と生活の両立に苦慮しないように、子育てを楽しみながら仕事も頑張れるように、この事業を継続してまいります。引き続きご支援賜りますよう、何卒よろしくごお願い申し上げます。



←サイトトップ



←保育SS トップ



←長崎大学病院寄附金